

令和7年度 第2回北九州市社会教育委員会議

1 日 時：令和7年8月18日（月）10：00～11：40

2 場 所：生涯学習総合センター 2階 第2・3研修室

3 出席者：委 員 他 11名  
事務局 総務市民局長 他 3名

4 議題、議事の概要

（1）総務市民局長あいさつ

（2）議題

次期「北九州市生涯学習推進計画」について

5 主な質疑応答、意見等

議題 次期「北九州市生涯学習推進計画」について

事務局：《これまでの次期推進計画に関する議論経過について説明》

委 員： 「数字よりも方向性やビジョンを重視している点を評価」とはどういうことか。

事務局： これまでの計画が事業ごとの数値目標管理であったのに対し、今回の計画は北九州市の未来像を語る方向性・ビジョンを中心的に説明していきたい。

委 員： 方向性・ビジョンを重視するのはいいが、ファクトベース、数字をきちんと見た上でビジョンを語らないと、「数字よりも」という表現だけ見るとそれがうまく伝わっていない。

事務局： ご指摘の通りだと思う。ファクトベースの重要性を踏まえつつ、ビジョンの実行結果として KPI、主要な数値のマークも重要だと思う。「数字よりも」という表現は以後注意したい。

委 員： PDCA サイクルを回す上で数字が大事なので、そういうことであれば結構だ。

事務局： 《次期推進計画の素案について（最初から 13 ページまで）を説明》

事務局： 質問はあるか

《質問なし》

事務局：《資料 12 ページの「学習機会が充実していると感じているのは 48.1%」の数字について、正しくは 32.5%であると訂正》

事務局：《次期推進計画の素案について（14 ページから 20 ページまで）を説明》

議長： 18 ページのイメージ図について、市民センターと学校が独立して描かれているが、実際は人のつながりによって重なり合う部分があるため、そのように表現したほうがより実態に即しているのではないか。また、計画全体で「社会教育」と「生涯学習」という言葉が混在しているので、言葉を統一させたほうがいいのではないか。

事務局： 言葉の統一は改めて整理する。イメージ図は改めて修正する。

委員： 7 ページの「社会的背景」において、「VUCA」や「ウェルビーイング」といった横文字が使われているが、より分かりやすい日本語表現を用いたほうがよいのではないか。

事務局： なるべく分かりやすい言葉遣いを心がける。

委員： 計画は素晴らしいが、実際に実行するときに範囲が広すぎると他局との連携が課題となり、複雑化する可能性があるため、ある程度重点を絞るべきではないか。

事務局： 北九州市においては、地域コミュニティの再生・活性化を今年最大のテーマに置いて、今、議論を進めている。地域コミュニティにおいては、孤立・孤独等の課題が増える一方で支え手が少なくなり、自治会・町内会だけでは厳しい状況の中で、地域で活動するにはやはり学びが必要である。今回の生涯学習推進計画の改定にあたって、地域コミュニティのビジョンとの連動に重きを置いている。

次期生涯学習推進計画のポイントとして、1 点目は、まず地域コミュニティの支え手を長期的な視点でどうつくっていくか。2 点目は、支え手を広げるために企業、NPO、学生など多様な主体をどう巻き込むか。そのために総務市民局だけでなく、教育委員会や産業経済局など関係部局とディスカッションしている。3 点目は学びを楽しく、取りかかりやすいものにするため、オンラインや DX を活用して楽しく学べる環境づくりをやっていく。

委員： 社会教育・生涯学習というものを広げすぎると非常に難しい問題が出てくるのではないか。いろいろな問題の中で生涯学習としては問題解決としてこういうものを取り上げる、重点事項を3年計画でやっていこうとか、絞り込まれたほうが議論しやすいのではないか。

事務局： 生涯学習総合センターでも、自主的に学んだ市民が地域活性化にどう貢献するかを課題としており、今後取り組んでいきたい。

委員： 短期計画では特定のターゲット層を絞り込んで満足度を向上させ、長期計画では局をまたがって対応していく等、そういう求め方のほうが議論しやすいのではないか。

事務局： 地域コミュニティビジョンと連携し、15年後の将来像を見据えた大きなビジョンを策定しつつも、具体的な取り組みは5年刻みで進め、短期的にはターゲットを絞って取り組まなければならない。しっかり整理して取り組んでいきたい。

委員： 行政の生涯学習の対象について、自ら学ぶアッパー層だけでなく、少しのきっかけで一步を踏み出せる層がターゲットとなり得る。また、「市民へのわかりやすい広報と啓発」について、従来の紙媒体だけでなく、DXや生成AIを活用したSNS、YouTubeなどでの情報発信、Z世代や若者層にどうアプローチしていくか、今後注力していただきたい。

事務局： ≪次期推進計画の素案について（21ページから最後まで）を説明≫

委員： 市政モニターアンケートで示された「学んだ成果を生かす機会・場がない」「情報が少ない」という課題について、情報発信の改善と活用が求められている。

また、地域団体は現状として活動に追われている。活動を通して学びの場に誘うという方法もあるのではないか。そのためにはリーダー層の学習機会の拡充、より小さい単位での学習機会が必要ではないか。

事務局： 情報発信の工夫については、今後検討していく。

事務局： 地域コミュニティ検討会議でもリーダーになる方の学びの場の提供と、学んだことを蓄積してみんなに伝えていくことの重要性が議論に上がっている。学びと活動が循環していけるような環境づくりが大事だと思っている。

委員： 13 ページの課題と 27 ページの重点的な取り組みを関連付け、「市民センター事業の支援人材の育成・強化」について、民間の経験豊富な人材、特にバブル世代などの方を活かせるのではないか。人材支援のイメージを聞きたい。

また、30 ページの「多様な主体との連携」について、老人ホームと幼稚園が一体化した福祉施設など、学校や市民センター以外の多世代が集まる「垣根の低い場」の事例が北九州市にあるか。そういう場を重点的な取り組み対象にしてはどうか。

事務局： 支援人材の育成について、既存の社会教育団体や社会教育士のネットワーク化、NPO 等との連携の見える化から始めていきたい。

多世代が集まる場については、八幡西区の社会福祉法人や小倉北区の NPO の事例等がある。既存の場所と行政がどう連携していくか、市民カレッジでの活用など少しずつ取り組んでいる。

事務局： 市民センターにおいても文化祭などで老人ホームや保育所と連携しており、そこそこの地域に合った形での連携を図っていきたい。

事務局： NPO や市民活動団体がそれぞれの分野で社会課題解決に取り組んでいる。市としては、さらに地域と NPO や市民活動団体が協働できるよう、うまくつなげたい。

事務局： 頂いた意見を反映させ、今の案をさらに良いものへ修正していきたい。

議長： 今回のビジョンは 2040 年を目途にした大きな方向性である。今後 5 カ年ごとの具体的な取り組みについて、数値目標や統計結果の提示が必要ではないかと思った。